

# 『尖閣問題の現状と展望』

むかいだ  
向田昌幸著を読んで

柴田 幹雄 陸自75

読み始めて、尖閣問題についてそうだったのか、と膝を打つような事柄が極めて明快に記述されており、笑いと涙の苦労話もあり、通勤途上の地下鉄で夢中になって読むうち下車駅を乗り過ごしてしまいました。

著者の向田氏は、筆者とは防衛研究所特別課程の同期生で、海上保安庁警備救難監を最後に退官された俊才で、また穏やかな紳士でもあります。

海上保安庁は尖閣諸島に対する中国の主権侵害に対してその最先端で奮闘していますがなぜ海保なのかという疑問に対する答えから始まり、沿岸警備隊と軍の関係など色々な疑問に明快に答えてくれます。

そもそも台湾が尖閣諸島の領有権を言い出した根本原因は何なのか。それは尖閣周辺の石油埋蔵の情報に目がくらんだ蒋介石がニクソン大統領に、沖縄返還に際し、日本の尖閣諸島に対する「残存主権」「潜在主権」をあいまいにするように懇願し、ニ

クソン大統領は従来の認識を変えこれを認めて、その帰属について中立不関与という立場を表明するといふ、いわば背信行為に出たことです。ではなぜニクソンは蒋介石にいい顔をしようとしたのでしょうか。

日本はことあるごとに尖閣諸島について日米安保第5条の適用を米国に確認していますが、やるべきことは、島の帰属が日本であることを認めさせることです。

また「魚釣島」は日本名、「釣魚島」は中国名であるかのように言われているがそもそも両方とも琉球人がつけた名前であって中国がどう言う理由にならないこと、尖閣領有権棚上げ論の実態から将来どうすべきかまで記述されています。

まずは会員の皆様にはご一読をお勧めします。そして特に政治家、マスコミ関係者にとっては必読の書であると言えます。

